

顎補綴患者の口腔関連QoLと口腔衛生状態に関する臨床的検証

古賀, 小百合

<https://doi.org/10.15017/4060087>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (歯学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	古賀 小百合			
論文名	顎補綴患者の口腔関連 QoL と口腔衛生状態に関する臨床的検証			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	築山 能大
	副査	九州大学	教授	柏崎 晴彦
	副査	九州大学	教授	和田 尚久

論文審査の結果の要旨

口腔がんの手術により顎欠損を有する患者は一般的に機能回復、審美的回復のために顎義歯を使用する。また近年、歯科衛生士との協力で口腔衛生指導と口腔ケアも取り組まれている。本研究では顎補綴治療前後での口腔関連 QoL と口腔衛生状態の変化やこれらの相互関係、またそれぞれに影響を与える因子について検討した。また、この口腔衛生指導の効果を検証するために、顎補綴患者を指導介入の有無で2群に分け、さらに顎欠損を有しない患者も含めた合計3群で口腔衛生状態の比較検証を行った。

まず、口腔関連 QoL を Oral Health Impact Profile (OHIP) スコア、口腔衛生状態を Plaque Control Record (PCR) スコアで数値化を図り、比較したところ、顎補綴治療、口腔衛生指導介入の前後でそれぞれスコアは有意に低下していた。また、各スコアと患者の年齢、残存歯数、咬合支持数、オクルーザルユニット (OU) との相関関係を分析したところ、年齢が低いほど、OU が多く残存しているほど、口腔関連 QoL が改善した。一方、PCR とはいずれも相関関係が認められなかった。また、OHIP スコアと PCR スコアの変化にも相関は認められなかった。以上の結果から、顎補綴治療によって口腔関連 QoL は改善し、口腔衛生指導によって口腔衛生状態が改善すること、口腔関連 QoL の改善には年齢と OU が影響するが、口腔衛生状態の改善には年齢や残存歯の状態、また、口腔関連 QoL の影響を受けないことが明らかになった。

次に、歯科衛生士による口腔衛生指導を定期的に受けている顎補綴患者 (Group-1)、口腔衛生指導を受けていない顎補綴患者 (Group-2)、ポジティブコントロールとして歯科衛生士による口腔衛生指導を定期的に受けている顎欠損を有しない患者 (Group-3) について PCR スコアを比較したところ、3群間に有意差を認め、Group-3、Group-1、Group-2 の順に PCR スコアは低かった。また、3群間に年齢差はなかったものの、Group-3 では Group-1、2 よりも残存歯数、咬合支持、OU が有意に多かった。以上の結果から、顎補綴患者への口腔衛生指導や口腔ケアは、口腔衛生状態を良好に保つことに有効であったが、その口腔衛生状態は、同様の指導やケアを受けている顎欠損を有しない患者ほどの状態には至らなかった。

これらの研究より、顎欠損を有する患者に対する顎補綴治療は口腔関連 QoL の改善に有効であること、口腔衛生指導と口腔ケアは患者の年齢、残存歯の状態や顎義歯の状態などによらず、口腔衛生状態を改善するのに有効であることが明らかになった。ただし、口腔衛生指導と口腔ケアを行っても顎欠損を有しない患者と同程度までの改善はできていなかったことから、更なる取り組みが必要であることが示唆された。

本研究で得られた結果は、顎欠損を有する患者に対する顎補綴治療に関する新しい知見をもたらすものであり、博士(歯学)の学位授与に値する。